全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：外国語第Ⅰ教育部会
部会長名：加藤雅之
作成者名：柏木治美、石川慎一郎、木原恵美子、加藤雅之

概要（2ページ）

１．組織・運営について

外国語第Ⅰ教育部会の企画運営に関しては、下記の組織を通じて行なった。
(1) 幹事会（月 1～2 回、随時開催）
部会長：　加藤雅之（全般、非常勤講師への対応）
幹事：　柏木治美（教科書、予算）
幹事：　石川慎一郎（時間割）
幹事：　ティム・グリア（グローバル英語コース）
(2) 英語教育企画委員会（国際コミュニケーションセンターに設置の委員会、毎月第２金曜日に開催）
(3) 英語教育部会（毎月第３金曜日に開催）

部会構成は以下の通り：

国際コミュニケーションセンター	12 名（専任 9 名、特任 2 名、特命 1 名）
国際文化学部	18 名（専任 17 名、特任 1 名）
文学部	1 名（特任 1 名）
非常勤講師	46 名

２．実施状況について
（１）カリキュラム
Academic English としての教育的位置づけを踏まえ、下記の必修/選択科目を提供している。
○ベーシック科目
English Literacy
English Communication
Productive English
Autonomous English
なお 1 年生後期の Literacy/Communication では、英語学修に積極的な関心をもち、英語学部試験において優秀な成績を修めた学生に対して、定員の 10%を目途として英語特別コース（Advanced Course in English）を開講している。

○アドバンスト科目（2 年後期以降）
Advance English

○高度教養科目外国語セミナー A-D

（２）今年度の工夫・改善点

多様な学修機会の提供の観点から、英語外部試験で一定以上の成績をおさめた学生に対して下記のいずれかの選択肢を提供することとした。
A　単位授与
第 1 回目の申請（5 月）では 4 単位授与（TOEIC730 以上）が 60 名、6 単位授与

（TOEIC830 以上）が 13 名であった。
B　英語特別クラスへの参加（244 名）
英語特別クラスでは、学生の企画・運営により 2018 年 2 月 11 日「Student Conference」が開催された。
（参考 https://takeshinomail128.wixsite.com/acestudentconference）

３．課題について
（１）Autonomous English では英語スキルの向上と合わせて、自律的学習態度の育成を目標としている。これは、英語学習を教室内での勉強としてだけではなく、また、大学という場での知識の獲得ではなく、生涯にわたって、英語を使い続け、持続的な向上を目指すための、スモールステップとして設定したものである。ネット環境があれば、自宅でも通学電車の中でも学習ができるというメリットがある反面、非対面で行われるため、目標設定を安易にしてしまう傾向も見られた。来年度は、こうした反省をふまえ、e-Learning による学習量の充実（30 レッスンから 40 レッスンへの増加。難易度の見直しとリスニング問題の増加）とともに、学習成果についても統一テストで評価することにしている。
（２）年度末にかけて、英語の必修を４科目にすることが決まった。英語をとりまく環境への柔軟かつ、効果的な対応がもとめられることとなる。

４．総合所見
グローバリゼーションの進展にともない、英語に対する学生のニーズや社会からの期待が、ますます高まってきている中、英語部会の活動も柔軟で迅速な対応を求められている。とりわけ、専門課程での英語使用を想定した Academic English という目標設定をいかに具体化していくか、また、4 科目という限られたリソースの中でいかに効率的・効果的に学生を指導していくかが焦眉の課題となっている。その中、今年度、ACE が順調にスタートをきり、学生カンファレンスも成功裡に終えることができた。ACE で取り組まれたプレゼンテーションやレポートライティングは、Academic English という目標の中で中心となる要素である。ACE における取組みの成果を可能な形で全体にも取り入れていくことが Academic English という目標を考えていく上で重要ではないかと考える。時間をかければ、お金をかければ、だけではなく、知恵と努力によって、時間がなくてもお金がなくてもできることを見つけていきたいと考えている。

項目・観点ごとの記述

基準５　教育内容及び方法

５－１【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ，それに基づいて教育課程が体系的に編成されており，その内容，水準が授与される学位名において適切であること。】

５－１－③：　教育課程の編成又は授業科目の内容において，学生の多様なニーズ，学術の発展動向，社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150 字以上）
リーディング系科目ではニュース、小説、エッセイなど多様なジャンルの文章を読む工夫がなされていいた。オーラル系科目では、さまざまな AV 媒体を活用し、英語音声に親しませるとともに、スピーチやプレゼンテーションなどの制作物（プロダクト）を生成するなど、アクティブ・ラーニングを意識した指導方法が多く取られていた。また、音声学、コーパス言語学や World Englishes、音声学、認知言語学的観点から最新の研究成果を取りいれた指導も多くなされていた。

根拠資料 ・シラバス ・授業中の配付教材 ・学習管理システム(BEEF)上における掲示、参考情報

５－２【教育課程を展開するにふさわしい授業形態，学習指導法等が整備されていること。】

５－２－①：　教育の目的に照らして，講義，演習，実験，実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり，それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150 字以上） 各クラス、平均 40 名弱の人数配分がなされており、その中でタスクやアクティビティに応じて、ペアやグループなどの少人数編成が取りいれられており、多様な授業形態が展開されている。また、文法説明や、DVD の視聴、学生の発表、発表に対するフィードバックの活用など、外国語学習のさまざまな局面で、それぞれの目的に最適化された授業形態が選択されている。
根拠資料 ・シラバス ・授業記録 ・配布物

５－２－②：　単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100 字以上） ほぼすべての授業で復習および準備学習の指示が的確になされているのが確認された。また、BEEF 導入の 2 年目にあたり、徐々に活用される授業も増えている。単に、宿題・予習を義務化するというのではなく、自律的学習の一環としてとらえる観点が不可欠であると思われる。
根拠資料 ・シラバス ・BEEF の活用

５－２－③：　適切なシラバスが作成され，活用されているか。

観点に係る状況（50 字以上） 本部会では、基本的な部分は全員で協議した共通シラバスとして提示した上で、各教員の研究・教育背景に応じた調整を行っており、結果的にさまざまなアプローチと多様なコンテンツがダイナミックなバランスをとって共存している。
根拠資料 ・シラバス

５－２－④：　基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100 字以上） 各授業でオフィスアワーを設ける等、教員個人で対応するとともに、国際コミュニケーションで行っているランゲージ・ハブ、KALCS、e-Learning 教材などを通じた教室外活動への参加を促している。また、リーディング III については、再履修者専用クラスを設けて、きめ細かい指導を行った。また、Autonomous についても、授業の特殊性に

鑑み、第３クォーターに再履修クラスを設定した。
根拠資料 ・シラバス ・外国語教育ハンドブック

５－３【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ，それに照らして，成績評価や単位認定，卒業認定が適切に実施され，有効なものになっていること。】

５－３－②：　成績評価基準が策定され，学生に周知されており，その基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。

観点に係る状況（100 字以上） シラバスの段階で、成績基準の策定と公表は義務付けられている。外国語教科の特性上、期末テストだけの成績ではなく、授業への取り組み、小テスト、プレゼンテーション、ポスター発表、筆記試験など、さまざまな評価基準が組み合わされている。
根拠資料 ・シラバス ・授業での説明 ・BEEF での説明

５－３－③：　成績評価等の客観性，厳格性を担保するための措置が講じられているか。

観点に係る状況（100 字以上） 部会長および幹事が、各教員のシラバスをチェックし、厳格な成績評価基準や、多様な評価方法について客観性・厳格性が保たれていることを確認しており、定例部会でも機会を設けて、これらの重要性について注意を喚起している。
根拠資料 ・シラバス ・授業での説明 ・部会議事録

<u>基準６　学習成果</u>

６－１【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして，学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について，学習成果が上がっていること。】

６－１－②:　学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して，学習成果が上がっているか。

観点に係る状況（100 字以上） 学生による総合評価を基準にした回答では多くの授業について満足度が高く学習成果が上がっていることが確認できた。それ意外にも授業の中で独自にアンケートを実施している教員もいる。振り返りアンケートによる数値を使用する場合は、回答者数があまりに少ない場合の信頼性の問題があり、この基準を正確にクリアしたとみなすことは非常に困難と言わざるを得ないものの、部会全体の満足度の平均値は 4.0（教養教育院全体 4.0）でありきわめて高い。
根拠資料 ・授業振り返りアンケート

基準７　施設・設備及び学生支援

７－１【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され，有効に活用されていること。】

７－１－④：　自主的学習環境が十分に整備され，効果的に利用されているか。

観点に係る状況（50 字以上） 国際コミュニケーションセンターでは教室外の学習環境として CALL 自習室や、ランゲージ・ハブ、KALCS、e-Learning 教材などを整備しており、初回のガイダンスで詳しく説明を行っている。
根拠資料 ・外国語教育ハンドブック

７－２【学生への履修指導が適切に行われていること。また，学習や課外活動等に関する相談・助言，支援が適切に行われていること。】

７－２－①：　授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

観点に係る状況（100 字以上） 本部会では、第１回目の授業で「外国語教育ハンドブック」を利用した授業ガイダンスが実施されており、英語のカリキュラム、GEC コース、授業紹介、外部テストサポート、ハブ、CALL 自習室、KALCS 案内など、神戸大学における外国語学習についての包括的な情報を伝えている。
根拠資料 ・外国語教育ハンドブック

７－２－②：　学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており，学習相談，助言，支援が適切に行われているか。
また，特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり，必要に応じて学習支援が行われているか。

観点に係る状況（100 字以上） 学生の学習支援に関する情報は、現在のところ部会長のところに集約されており、教員の要請に応じて部会長が相談などのサポートに応じる体制をとっている。しかし、今後こうしたサポートの増大が予測されることから、広く幹事会の間で共有し、また、定例会でもフィードバックを行うことが望ましいと考えている。
根拠資料 ・部会長の個人的記録